



誕生日には わら半紙を

荻原浩

小学生の頃、誕生日プレゼントは何がいいか、と親から聞かれた僕は、いつもこう答えていた。

「紙」

絵を描くのが好きだったのだ。絵といつても鉛筆か、たまに色鉛筆を使う漫画の真似事みたいなものだから、描く道具には困らない。問題は、「どこに描くか」。僕が子どもの頃の一九六〇年代はいまより紙が貴重品だった。

スケッチブックなんてしゃれたモノは贅沢品。学校のノートはすでに落書きで埋まっている。カレンダーや広告チラシの裏側はもちろん見逃さない。そんなわけだから、誕生日に一年分の紙を買ってもらおうのだ。近所の文房具屋で。

毎回、何枚ぐらいだったっけ。低学年の頃は百枚で、その後、二百枚に増えた

気がする。

お店で受け取る紙束はずつしりと、子どもにはかなりの重量感があった。これで一年間だいじょうぶ、と思わせる頼もしい重さ。実際には半年も持たないのだけれど。画用紙は値段が高いから、わら半紙だ。

わら半紙って、わかりますかね。もはや死語か？ お若い方にご説明しますと、いわゆるザラ紙、ってこれもわからんか。ようするに、くすんだ色のツルツルとかスベスベとは無縁の紙。僕らの時代にはテスト用紙や学校からの配布プリントにもこれが使われていた。

表面がザリザリしていて鉛筆の先がやたらに引つかかる。描き損じに消しゴムをかけてうまく消えず、黒い痕が残っちゃう。それを無理にこすると破ける。そんな紙だ。

何を描いていたのか、はつきりとは覚えていないのだが、写生や模写といった忍耐力が必要なことは苦手だったから、想像で描いた怪物やらロボットやら秘密兵器やら、そんなものばかりだったと思う。

白い紙を前にすると胸が躍った。実際には真っ白じゃなくて薄茶色だったけれど、それでも。気分は新世界を誕生させ



おぎわら・ひろし●作家。埼玉県生まれ。成城大学経済学部卒業。広告制作会社勤務の後、コピーライターとして独立。1997年『オロロ畑でつかまえて』で小説すばる新人賞受賞。2005年『明日の記憶』で本屋大賞2位、第18回山本周五郎賞受賞。14年『二千七百の夏と冬』で第5回山田風太郎賞を受賞。16年『海の見える理髪店』で第155回直木賞を受賞。

る創造主。紙の左から右へ線を横に一本引けば、そこが未知の惑星や、恐竜の跋扈する太古の大陸の地平線になった。空飛ぶ潜水艦が緊急浮上する水平線になった。

ザリザリ。ゴシゴシ。ザリザリ。ザリザリ。ゴシゴシ。ビリビリ。あれだけのわら半紙を消費していたのに、そこに文章を書いた記憶はまるでない。作文は好きじゃなかったのだ。あの頃は自分が小説家になるなんて夢にも思わなかった。

職業柄、紙にはいろいろとお世話になっているが、書くのはパソコンだから、日々の仕事のうえでは、メモを書いたり、原稿や資料をプリントアウトしたりコピーしたり、そんなことばかりに紙を使っている。わら半紙よりはるかにツルツルスベスベの紙を。

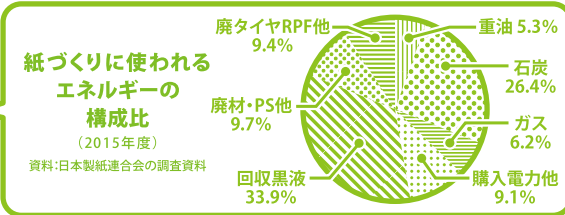
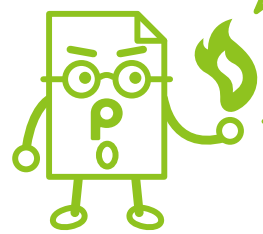
小学生の僕がそれを見たらきつと、顔をしかめて字ばっかりの片面をひっくり返して、真っ白な裏側に絵を描きはじめるだろう。あ、こら、校正紙に落書きするな。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙になった後のもうひと頑張り。

原料となる木材の繊維部分は紙づくりに、繊維を取り出して残ったその他の部分(黒液)はエネルギーに。紙をつくるときに使われるエネルギーの約30%が、この黒液(バイオマス)^{*}でまかなわれているんだって。木材は大切な資源として、最後まで無駄なく使われているんですね。

*バイオマスとは、再生可能な、生物由来の有機性資源で化石資源を除いたものです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

今回は5月4日・11日合併号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake